

「ちばエコ農産物」栽培のために!

(品目別栽培カード 14)



# サツマイモ・普通掘り栽培

千葉県農林水産部

## 1 栽培基準

「ちばエコ農業」のサツマイモは、早掘り栽培、トンネル栽培、普通掘り栽培の3作型に区分されています。栽培基準は、化学合成農薬の使用成分回数が、早掘り及びトンネル栽培では5回以下、普通掘り栽培では6回以下です。化学肥料使用量(窒素成分)は、いずれの作型とも1.5kg/10a以下で、堆肥の施用量は500kg/10aが目安量とされています。(表1)



▲ サツマイモのマルチ栽培

表1 「ちばエコ農産物」栽培基準における農薬の上限回数と窒素成分の上限量  
(平成18年4月現在)

作 型	上 限 量		堆肥施用の目安量 (kg/10a)	収穫期
	化学合成農薬使用回数 (使用成分×回数)	化学肥料使用量 (窒素成分kg/10a)		
早掘り栽培	5	1.5	500	7~8月
トンネル栽培	5	1.5	500	7~8月
普通掘り栽培	6	1.5	500	9~11月

注)化学合成農薬は、採苗以降の使用回数

## 2

## 栽培基準達成のポイントと考え方

### 1 雑草防除

サツマイモ栽培では、マルチ被覆からつるが伸長するまでの約1か月間に、畦間に発生する雑草を防除する必要があります。除草剤による防除が一般的ですが、ハービー液剤(化学合成農薬に含めない農薬)を活用することで化学合成農薬の使用成分回数を減らすことができます。本剤は、微生物が産出する発酵生産物“ピアラホス”を有効成分とする非選択性茎葉処理剤で、適期に防除することで十分な除草効果が得られます。なお、除草剤散布に当たり、除草剤が作物に飛散して薬害が生じないように注意する必要があります。

### 2 病虫害防除

病虫害防除では、圃場ごとに病虫害の発生状況を毎年観察し、防除の必要な病虫害を把握しておくことが重要です。

#### A 圃場の準備～植付けまで

##### ● 立枯病

立枯病は、高地温や土壌の高pHと乾燥によって発病が助長される土壌伝染性の病害です。発病株は、葉の黄化や紅葉化などの病徴を示し、進行すると枯死に至ります。発病程度が軽い場合は、いもは形成されますが、黒褐色円形状の病斑を生じ商品性が損なわれます。クロルピクリン剤による土壌消毒が有効で、以前に発病が見られた圃場での処理は必須です。

##### ● つる割病

つる割病は、苗の切り口や細根の傷口から感染し、導管組織を侵す土壌伝染性の病害です。発病した種いもからの苗感染や育苗時の発病もあり、苗切り用の刃物の消毒・交換や発病株の抜き取りで病気の拡大を防ぎます。外観上、健全な苗でも保菌している場合があるため、圃場への病原菌の持ち込みを防ぐ上でも、ベンレート水和剤による苗消毒が必須です。以前に発病が見られた圃場では、クロルピクリン剤で土壌消毒することが望ましいです。

##### ● ネコブセンチュウ

ネコブセンチュウによる線虫害は、いもの目(毛穴)が深くなり、被害が激しいとひび割れを生じ、形状が乱れます。連作年数が多いと、土壌中の線虫密度が高まるので、線虫害の出やすい「ベニアズマ」や「高系14号」を作付けする場合、殺線虫剤の土壌処理が必須です。ギニアグラス、クロタラリア、落花生などの対抗植物を輪作体系に組むと線虫密度を減らすことができます。

##### ● 土壌害虫

コガネムシ類やハリガネムシ類の土壌害虫は、いもを食害し商品性を損ないます。多発圃場ではダズバン粒剤などの殺虫剤を土壌処理することが必要です。また、未熟有機物は、コガネムシ類の多発生を招くため施用を控えます。

## B 植付け～収穫まで

### ● アブラムシ類

アブラムシ類は、5月から7月にかけて発生が多く、吸汁加害により生育停滞を招きウイルス病を媒介します。主に寄生する“モモアカアブラムシ”は、いもが帯状にひび割れや退色する帯状粗皮病の病原ウイルスを保毒している恐れがあり、発生始めに殺虫剤を処理します。

### ● 食葉害虫

サツマイモに寄生する主な食葉害虫は、イモキバガ(イモコガ)、ナカジロシタバ、ハスモンヨトウなどのチョウ目害虫です。発生初期に被害が目立たなくても、食害が進み幼虫が大きくなると、数日のうちに被害が拡大し、いもの肥大不良や食味の低下を招きます。特に、9月以降に増えるハスモンヨトウによる被害が大きいので、圃場をこまめに観察し、若齢幼虫時に防除する必要があります。この害虫に対しては、ゼンターリ顆粒水和剤などのBT剤(化学合成農薬に含めない農薬)を活用することで、化学合成農薬の使用成分回数を減らすことができます。

表2 サツマイモ・普通掘り栽培の「ちばエコ農産物」栽培基準に適合した農薬防除例

処理時期	処 理 法	農 薬 名	10a当たり使用量 (希釈倍数等)	対象病害虫	備 考
5月 (植付け前)	全面土壌混和	ダースバン粒剤	9kg	コガネムシ類、 ハリガネムシ類	
	//	ネマトリンエース粒剤	10~30kg	ネコブセンチュウ	
	マルチ畦内処理	クロピク 80	30cm×30cm 間隔 に1穴2~3mL	立枯病、 つる割病	発病圃場で使用
	苗基部浸漬	ベンレート水和剤	500~1,000 倍	つる割病	浸漬時間は20~30分間
6月	畦間処理	※ハービー液剤	300~500 mL	畑地一年生雑草	散布液量は100~150L/10a
7月	散 布	トレボン乳剤	1,000 倍	アブラムシ類	発生に応じて使用
8月	//	トルネードフロアブル	2,000 倍	ナカジロシタバ	//
9月	//	※ゼンターリ顆粒水和剤	1,000 倍	ハスモンヨトウ	発生初期に使用

注)※印の薬剤は、化学合成農薬に含めない農薬



▲ つる刈り作業



▲ 掘り取り作業

### 3 施肥

サツマイモ栽培の一般的な窒素施用量は3kg/10a程度です。基肥には有機質肥料や有機質原料を含む有機配合肥料などを用いることで、化学肥料の使用量を削減できます。また、窒素の多施用や野菜栽培跡地などの残存窒素量が多い圃場は、“つるぼけ”しやすく、いもの肥大不足や食味の低下を招きます。このため、わらや籾殻などの植物素材を主体とした窒素成分の少ない完熟堆肥を使用することが望ましく、野菜栽培跡地などでは窒素施用量を控えます。

表3 サツマイモ・普通掘り栽培の「ちばエコ農産物」栽培基準に適合した堆肥及び肥料の施用例

区分	製品名	保証成分量(%)			現物施用量 (kg/10a)	成分施用量(kg/10a)		
		窒素	りん酸	加里		窒素	りん酸	加里
堆肥	稻わら堆肥				500			
基肥	有機アグレットサツマイモ専用300号	3(1)	10	10	100	3(1)	10	10
	苦土重焼りん	0	35	0	60		21	
総施用量						3(1)	31	10

注1)( )内は、総窒素量のうち、化学肥料由来の窒素成分量



▲「ちばエコ農産物」栽培基準で栽培されたサツマイモ

☆この「品目別栽培カード」に記載した農業使用は、平成19年度現地実証試験時点のものです。実際の農業使用に際しては、ラベルの表示をよく確認するとともに、最新の農業使用基準を守って使用してください。

- 著 作 千葉県農林水産部担い手支援課  
千葉県農林総合研究センター
- 編集・発行 千葉県農林水産部安全農業推進課
- 発行年月日 平成20年3月
- 内容についての問い合わせ先  
千葉県農林総合研究センター TEL.043(291)9987  
または各地域の農林振興センター